

---

# 春に溺れる

藤見日菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春に溺れる

### 【コード】

N9663W

### 【作者名】

藤見日菜

### 【あらすじ】

春、一面に花の咲くあの部屋で「私」と「彼女」は出会った。出会ってしまった。それが、どこにでもあるような悲劇の始まり。どこにでもあるような、恋の、はじまり。

「人の異常さが分かる人間なんているのかな」「みんな狂ってて、みんな正しいんだよ」

## 春（上）

埼玉県郊外に建つ、森沢病院。看板こそ掲げてはいないが、ここが精神病院であるという事は周知の事実である。私、斉藤敬は、その森沢病院に勤めている。今年で二年目だ。

私は病院の長い廊下をゆっくりと歩いてきた。ほのかに薄い青色で塗られた壁や床は、病院の白というイメージを裏切るものであるが、実は青色には精神安定の効果があり、白よりもいいのだと院長が言っていた。他の精神病院にいったことがないので他は知らない。しはらく歩き、廊下の途中にある扉の前で立ち止まった。上に院長室と書かれたプレートのある部屋の扉を、敬は軽くノックする。「入ってくれ」

中からの声を合図に、私は扉を開けて中に入った。

「失礼します」

部屋には白衣を着た、見た目40代後半といった男が扉に背を向けて立っていた。私が入ってきてても振り向くことなく、窓から外を眺めている。

「何のご用でしょう、院長」

「実は、君にこの子の主治医になってもらいたくてね」

そこでようやく院長はこちらに顔を向けた。院長は私に一枚のカルテを差し出した。私は近づいてそれを受け取る。

「紫藤、香住」

「その子は少し特別なんだ。なかなか合う人間がいなくて、君の前の主治医もやめてしまっただね。お願いできないか」

私はもう一度カルテに目を通した。写真に写っている少女は一見幸せそうに笑っているが、その笑顔はどこか不自然であると思った。

「私に拒否権はあるんですか」

「残念だけどないな」

そうして、私は紫藤香住の主治医となった。

\*

「香住」の病室にいく道すがら、院長は「香住」について話して聞かせた。

「香住は四年前、養父母を殺害したとして裁判にかけられた。その時の精神鑑定で精神異常と診断されて、うちの病院に入院することになったんだ。それ以来、香住はずっとこの病院で暮らしている。まあ、かなり変わった子だが、悪い子じゃない」

「そうですか」

普通なら。普通なら、「何故」とか、「どうして」なんて、ありきたりな言葉を人は言うのだろうが、私はそんなありきたりな言葉さえ出てこなかった。そうか、としか思わなかったので、口を開けば素直に「そうですか」としか出てこなかった。

「いいんですか」

私の先を歩く院長に、ぼつりと声を投げかける。

「なにが」

「その子『壊れてる』んでしょ。いいんですか、『壊れてる』私を主治医にして」

院長は、私の言葉の終わりと同時に立ち止まった。どうやら「香住」の病室についたようだ。院長は扉に手を掛けながら、笑っていった。「ちようどいいのさ。壊れてるくらいが」

\*

その病室は、他の病室とは違っていた。ほかの病室が薄い青で塗られているのに対し、この部屋の壁には、薄いピンクに一面の花が書かれていた。私が少々面喰っていると、どこからかくすくすといふ可愛らしい笑い声が聞こえてきた。見ると、病室に一つ置かれたベッドに腰掛けていた少女が手を口に添えて笑っていた。

「やあ、香住。調子はどうだい」

院長は、気さくに「香住」に話しかけると「香住」は笑いを引いて首を振った。

「ダメ、今日はあんまりよくないの。だって、今日もあの人たち、私のこと否定するんだもん。だからまた殺しちゃったの……」

「香住」は心底残念そうに言った。院長は苦笑して私の方に向いた。

「香住」に聞こえないように、唇だけで伝えられる。

(気にするな、ただの夢の話だから)

(はい)

「そうだ香住、今日はお前に会わせたい人を連れてきたんだよ。斉藤君だ」

私がベッドに近づくと、「香住」は驚いたように目を丸くして、次の瞬間にはとてもうれしそうに顔を綻ばせた。

「あなた、きつと私から離れられない」

そう言いながら、「香住」は手を伸ばして、私の腰に抱き着いた。

「やっと見つけた……」

こうして、私と「香住」は出会った。出会ってしまった。

## 春（下）

次の日、私は昨日院長と歩いた廊下を一人で歩いていた。香住の病室は、他の病室と少し離れたところにあつた。まるで隔離されているようだと思つた。そう思つて、私は少し可笑しくなつた。この病院自体が、世の中から隔離された存在ではないか。そこからさえも隔離される香住という少女に、私は少しばかり興味を持ち始めた。「おはよう、先生」

部屋に入ると、香住は外に向けていた顔をこちらに向けてにっこりと笑つた。私も薄く笑みを返し、香住に近づいた。

「調子はどう？」

すると、香住は昨日とは違い幸せそうに頷いた。

「今日はずつてもいいの。だつて、また先生に会えたから」

そういつて今度は照れたような笑みを浮かべる香住は、どこにでもいそつな普通の女の子に見えた。

「これからは毎日会いに来るよ。私は君の主治医だから」

そう言つと、香住は少し笑みを引いて、窓から離れてベッドに腰掛けた。香住はベッドの横にある引き出しを開けて、中から一枚の写真を取り出した。突然の行動に私は少し驚いて、無言でその様子を見つめてみると、香住はそれを私に差し出した。見ると、写真には夫婦と思わしき中年の男女と、その二人に挟まれて立っている少女の三人が写つていた。今より少し幼いが、その少女は香住だつた。

「その二人だよ、私が殺した人たち」

香住の言葉で、私は院長の話の思い出した。そういえば、香住が四年前、養父母を殺害した過去を持つていたのだつた。

「いままでの先生たちは、そのせいで私をまるで触つたら爆発する爆弾みたいに扱つて、あんまり優しくしてくれなかつた。あんまり好きじゃなかつたの。だから心配しなくてもよかつたのに。好きでもない人を、殺したりしないのに」

私はもう一度写真を見て、それを彼女に返した。香住は受け取った写真を、大事そうにまた元の場所にしまった。

「その写真に写っている君は、とても幸せそうに見えるけど。どうして、殺したりしたんだい」

私は香住と話すことで、ますます彼女に対する興味が強まるのを感じていた。自分でも驚くことだった。私は何かに対する興味とか、関心といったものが著しく欠如しているのだと、昔誰かが言った。今では自分でもそう思っている。

「二人が、私のこと好きで、私のこと必要としてくれていたうちにサヨナラしたかったから。嫌いになってお別れなんて、そんなの嫌でしょう？」

香住は立ち上がって部屋の冷蔵庫を開けた。中からコーヒーの缶を二本取り出すと、一本を私に渡した。手のひらに丁度収まる大きさの小さな缶を軽く握ると、ひんやりとした感触が手のひらから全身に広がる感覚が心地よい。

「ねえ、先生。私のこと頭おかしいと思う？」

香住も同じように缶を手で握ったり、持ち替えたりして遊びながら聞いてきた。私は少し考えて答えた。

「さあ、人の異常さがわかるほど、正常な人間なんているのかな」

香住は私の答えを聞いて、意外にも嬉しそうに笑った。

「きつとこないよ。みんな狂ってて、みんな正しいから」

## 夏（上）

今年の梅雨は、ここ数年でもっとも梅雨らしく、もう一週間も雨の日が続いていた。梅雨は、春に続いて精神科がもっとも神経質になる時期でもある。暗く、じめじめした日が続くと、患者たちの鬱がさらにひどくなるからだ。最近の私は一日のほとんどを香住の病室で過ごすようになっていた。

「雨の日って、私は好きだな」

香住は今日も窓辺に椅子を置き、そこに座って飽きもせず外を眺めていた。私は少し前に持ってきておいた自分のマグカップと、香住のカップにティーパックを入れ、ポットに入れて持ってきたお湯を注いだ。

「どうして？」

「だって、雨の日ってほかの人と引き離されて、自分一人だけであるみたいに感じない？　そういうの、安心するの。自分の中の自分がすごく安定してて、好き」

「一人が好きなの？」

「たまにはね。本当は一人の方がいいって自分でもわかってるの。でも独りは嫌だから……」

香住はそこで少し言葉を切って、手招きして私を呼んだ。私が素直に香住の傍にいくと、香住は私の手を取って、そつと握った。

「近くにいると、求めちゃう。殺したくなるくらい」

手を握る力が強くなって、私の指先が次第に紫に変わっていく。「痛いよ」と言うと、「ごめんなさい」と笑いながら、香住は手を放した。

「先生は殺したりしないから大丈夫よ？」

「それは、私のことが好きではないということかな」

「覚えてたの？　先生のこと好きだよ、殺す必要がないだけ。だって先生は」

そこで突然、香住は口をつぐんだ。先を促すと、秘密、と言って微笑みだけだった。

「ねえ、先生はなんで精神科の先生になろうと思ったの？」

急に話題が変わったことに、私は特に驚きはしなかった。話がころころと変わるのはいつものことだった。香住は興味の対象の移り変わりが激しいのだ。

「さあ、あんまり覚えてないけど、たぶん尊敬していた先生がいて、その人が精神科だったからだったと思う」

「先生、尊敬する人がいるの？」

「意外かい？」

「意外も何も、私と先生がおなじこと考えるほうが珍しいと思うけど。私はただ、先生が尊敬するような人って、どんな人か気になっただけ」

香住は、腰まで伸ばした黒髪を、指で弄びながら答えた。何か考え事をするときの香住のくせだ。香住は指に髪を絡ませながら、再びベッドの方に戻った。腰掛けて足をばたつかせると、それに合わせて長い髪も波打った。さらさらで絹のようなそれは、触ると壊れそうな飴細工を思わせた。壊してみたいと思っ、ばかばかしいと一蹴した。

午後五時になって、私は病室をでた。廊下を少し歩いたところで院長と出会った。

「よ、どうだい、香住とは上手くいっているか？」

「ええ、まあ特に何をするわけでもないですけど」

二か月経って、私と香住がしたことと言えば、毎日朝から夕方まで病室でお茶を飲んだり時々話したり、読書をしたりするくらいのものだ。一回、病院の庭を散歩もした。

「やっぱりお前をあの子に付けたのは、間違いじゃなかったな」

「それは褒められてるんですかね」

「ああ、褒めてるさ。目いっぱいいな」

「じゃあ褒められついでにお願いがあるんですが」

「なんだ」

「明日、一日だけでいいんで休みください」と聞くと、院長は少し間を置いて「理由は？」と聞いてきた。

「明日、彼女の誕生日なんですよ。ほとんど休みないで、せめて誕生日くらい一日彼女の言うことを聞いて過ごそうかと」

院長は驚いたようだった。確かに二年間ここに勤めていて、院長に彼女がいると言ったことは一度もなかった。私と院長の間でそんな話にならなかったというのもあるが。去年の彼女の誕生日は、あいに彼女のほうにどうしても外せないようがあり、その日が終わる前の数時間を共に過ごしただけだった。

「まあ、お前の有給はたんまり残っているからな。それは構わないが、香住にはなんて言うんだ」

院長が心配しているのはどうやらそこらしかつた。私は香住の主治医になってから、香住の病室に通うのを一日たりとも欠かしたことはなかった。香住は、私に彼女がいると知ったらどのような反応をするだろうか。少し興味があった。

「一日くらい、彼女も我慢してくれると思います」

「じゃあ聞ぐが、もし香住が泣いてお前にいかないでと縋ったら、お前はどうする？」

そう聞かれて、私は少し考えてしまった。そう、私は彼女を取ると即答できなかったのだ。私はそんな自分に呆れて、心の中でため息を吐いた。

「そうですね……彼女もすごく楽しみにしてくれているので、今回はやはり彼女を優先させていただきます」

この場合の模範解答のような答えを返すと、院長は「まあ、普通そうだよな」と言った。

「いいぞ、ただし、ちゃんと香住に言いにいけよ。黙って休むとさすがに怒るだろうからな」

「ありがとうございます」

そこで院長と別れ、香住に会うために私は来た道を引き返した。

\*

「ん、別にいいよ」

私がお先ほど院長に話した内容とほとんど同じような話をして、一日休暇の許可を求めると、香住は意外にもあっさりと言定の意思を示した。私はいささか拍子抜けしてしまい、「そう」としか返すことができなかった。そんな私に、香住は笑って言った。

「なあに？　もしかして、私が泣いて、いけないでとか言うと思った？」

「それを予想しなかったわけじゃないけど」

「あはは！　確かに、先生に恋人がいるっていうのは驚いたけど。

でも、そんなの私にとってあまり問題じゃないの。私にとって大切なのは、事実より真実だから」

「香住はたまに難しいことを言うね」

「他人が何を思って言葉を発しているかなんて誰にもわからないのだから、他人の言葉で難しくないなんてことあるのかしら？　あ、超能力者とかっていうなら話は違っけど」

「さあ、私はもうとつくの昔に、考えることを辞めてしまったからそれが会話の終わりを告げるものだと言った香住もわかったのか、「ならしょうがないね」と言ってベッドわきに置いていた本に手を伸ばした。それを合図に、私も部屋を出た。

## 夏（下）

私は朝少し遅め　　といつても普段の五時起きに比べての遅めに起き、なまけものようにゆっくりとした動作で支度をして、午前十時に家を出た。彼女の家は、私の家から電車で二駅のところにある。時間にして約十五分。彼女からは再三「一緒に住まない？」と言われてきたが、私は彼女がそういうたびに断り続けてきた。別に、彼女のことを嫌いなわけではない。ただ、まだ一人でいることのできる時間が欲しいだけなのだ。

そんなことを考えている間に、もう何度も通って体が覚えた道順を、脳がまったく別のことを考えていても道順を染みつかされた体が勝手に辿って、気が付くと私は彼女の家の前に立っていた。

彼女は、この三階建ての賃貸マンションの一室に学生のころから住んでいる。学生のころはこの1LDKの部屋がうらやましかったが、それなりにおおきな会社に勤めている今でも、この部屋に住み続ける理由はよくわからない。というのもここは駅から歩いて30分、近くのバス停までも20分という交通面から見ればあまり立地がよいとは言えない場所に建っているからである。彼女は車どころか、そもそも免許すらまだとっていないので、通勤には電車を使っている。それなら駅の近くにいくらでも部屋があるだろうし、彼女の収入ならそれなりにいい部屋を借りることができるだろう。ある時そんな話になって、今考えているようなことを彼女に言うと、「ここがいいのよ。住み慣れているところが安心するの」と答えたのをぼんやりと思い出した。私は別に彼女がどこに住もうが構わなかったので、「そう」とだけ答えてその話題は終了した。

彼女の部屋のある三階まで階段　このマンションにはエレベーターがない　で上がり、一番奥の部屋のチャイムを鳴らす。ぱたぱたというスリッパの音がして、続いてガチャリという音と共に扉が開けられた。

「いらつしやい」

「おじゃまします」

彼女、近藤沙耶はにつこりと笑って私を部屋に招き入れた。

沙耶とは、学生の際に友人の紹介で知り合った。私も学生るときは今ほど『壊れて』はいなかった（自覚がなかったともいえる）ので、人並みの人付き合いを望んだし、彼女も欲しいと思ったりしていた。そんなときであったのが沙耶で、ドラマのように一目惚れだとか、激しい恋心を抱いたとかいうわけではなかったが、なんとなくウマガ合ったのだろう、私たちは付き合い始め、その付き合いは今でも続いている。

「今日は、一日休みもらったから」

「ほんと？　じゃあ、今日は一日ずっと敬と居られるんだね」

行きがけに買ってきたワインを沙耶に渡しながらそう伝えると、彼女は嬉しそうに笑った。人はそれを無邪気な笑顔を評するのだろう。実際、私もそう思ったし、そんな風に笑う彼女が微笑ましかった。しかし、冷静な私は、無邪気とはこんなものではないと言っていた。じゃあ無邪気とはどんなものだと自問自答して、帰ってきた答えは香住の笑った顔だった。私はそれを見なかったことにして、沙耶に微笑み返した。

「今日はどうする？　どこか行きたいところある？」

「んー、今日はあんまり出かける気分じゃないな。家でのんびりしたい」

私は沙耶の希望を聞いて今日一日を過ごそうと思っていたので、異論は唱えなかった。しかし何もせず過ごすというのも途中で飽きるだろうということ、私たちは近くのビデオ店でDVDを借りて、それを部屋で見て過ごすことにした。

映画を見始めて小一時間ほど経ち、ヒロインが家の事情で恋人と別れさせられるという場面で、それまで静かに映画に見入っていた沙耶が口を開いた。

「敬は、こんな風になったとして、それでも私を選んでくれる？」

私は少し間を開けて答えた。

「選ぶよ」

「うそ、敬は絶対そんなことしない」

沙耶の断言する口調が耳に痛かった。そんなことないと言うのもなんだか白々しくて、彼女の言葉を否定することもできず私は黙り込んだ。沙耶が私のことをその程度は理解するくらいの付き合いはしてきたつもりだ。

「そうだね、僕にはそんな情熱はないし」

「……敬は変なところで正直だね。そこは嘘でも「そんなことない」っていうところだよ」

沙耶は半分呆れたように、半分楽しそうに言った。僕は沙耶の茶色に染めたショートカットの髪をゆっくりと撫でた。気持ちよさそうに目を閉じた沙耶の唇に、自分の唇を重ねる。啄むだけのバードキス。最後に軽く音を立てて放すと、沙耶は幸せそうに微笑んで、私の肩に頭を預けた。初めて、自分を好きだと言ってくれた彼女。沙耶が幸せならそれでいいと思った。私はこれからも彼女の恋人であり続けるだろう。たとえそれが真実でなかったとしても。

\*

次の日、私が香住の部屋を訪れると香住はまだベッドの上で眠っていた。綺麗な黒髪を白いシーツの上に広げ、静かに呼吸を繰り返しながら眠る姿は、童話にでてくる眠り姫を思わせた。そっと近づくと、人の気配に敏感な香住はうっすらと目を開けて、私の方に顔を向けた。

「おはよう、香住」

「おはよう、先生。おかえり」

香住はゆっくりと起き上って、そういった。

「ただいま」

香住は嬉しそうに、笑みを深めた。

## 秋（上）

夏の残暑も少しずつやわらぎ、季節が秋へと移ろうとしていた。とは言っても、まだまだ数十分も外にいれば汗ばむ陽気で、私も自転車をこいで病院に着くころにはしつとりと汗を掻いていた。

最近では一日のほとんどを香住と過ごしているが、もちろんそれだけで一日を終えるわけではない。他の患者の診察や、書類の作成もやる。午前中はその仕事をするために、香住の病室ではなく自分のデスクに向かった。

「斉藤はいるか？」

私が自分のデスクの椅子に腰かけたと同時に、院長が慌てた様子で私の名を呼びながら入ってきた。

「はい」

「いそいで来てくれ。書類仕事は後でいい」

どこに、とは言われなかったが、言われなくてもわかった。私は急いで香住の病室に向かった。

\*

「うっ、うっ」

扉を開けると、私は思わず顔を顰めた。カーテンは破け、机はひっくり返されていた。床には、私が持ってきたマグカップが、無残に砕かれ転がっていた。香住は、その部屋の真ん中でしゃがんで泣いていた。

「香住、どうした？」

呼びかけると、香住ははつと顔を上げて、立ち上がって私の胸に飛び込んできた。その小さな体を受け止めると、香住はいつそう大きくしゃくりあげながら泣き続けた。

「香住、泣いていてはわからないよ。どうしてこんなことをしたの

か私に説明してくれないか」

「ごめんなさい、ごめんなさいお母さんごめんなさい。もうしませんもうしないから、しないから殴らないで」

香住は私の問いかけには答えず、うわごとのようにそう繰り返すばかりだった。私は香住を連れ部屋の外に出た。隣の部屋が丁度空き部屋になっていたので、そこに香住を入れ、ベッドに寝かせた。

「大丈夫、だれも香住を殴ったりしないよ。だから安心しておやすみ」

「本当？」

「ああ、誰も香住を殴らないように、私がここで見張っていてあげるから」

そういつて手を握ると、やっと安心したのか香住はうとうととし始め、間もなく夢のなかに落ちて行った。私は香住が寝たのを確認すると静かに部屋を出た。

\*

「失礼します」

香住の部屋を出て、私は院長室に向かった。私は一応ノックをし、しかし返事を待たずにドアを開けた。

院長は入ってきたのが私だと認めると、私の少々無礼な行動については何も触れず、座るように促した。

「どうだ、香住のようすは」

「おちついて、今は隣の部屋で寝かせています」

院長はそうか、とだけ呟いた。院長がそれ以上なにも言わないと見て、私は自分が院長室を訪れた目的を口にした。

「院長、お伺いしたいことがあります。香住の、母親について」

母親、という単語が出た瞬間、院長の体が僅かに硬直したように見えた。ただあまりに一瞬で、見間違いかとも思えたが、なんとなくそうではないような気がした。

「あの子が、さつき泣きながら言ったんです。『ごめんなさいお母さん、もうしないから殴らないで』と」

「……あの子がそう言ったのか」「はい」

しばらく、どちらも口を開くことなく、壁に掛けられた時計の針だけがチクタクとひたすら時を刻んでいた。

「そもそも、香住が実の両親と一緒に暮らしていなかったは何故です？」

私は沈黙に耐えきれなくなった。というわけではなく、院長の言葉を待っていたのだが一向に彼が口を開こうとしないので、こちらから促すために自ら沈黙を破った。

「君は、それをしつてどうする」

「どうもしません。ただ、知りただけです」

院長は私の目を見た。私もその視線から逃げることなく、まっすぐ院長の目を見返した。

「……香住は、実の親に虐待されていたんだ。母親にな」

院長は観念したのか、重い口を開いて語りだした。

「香住の母親は元々情緒不安定で、子供を育てるのには向いてなかった。しかし彼女には親戚もいなくて、彼女一人で育てるしかなかった」

「父親は？」

「香住の父親、彼女の恋人だった男は……彼女が妊娠したことを知らなかった。二人が別れてから香住の母親が香住を身ごもっていることがわかったんだ。彼女はそれを別れた恋人には告げなかった」

「ともかく香住が生まれてから、二人は小さなアパートで暮らしていたらしい。しかし、さつきもいったように香住の母親は情緒不安定でね、香住が泣くたびに叩いたり蹴ったりしていたらしい。それでも、娘への愛情がなかったじゃない。落ち着いているときは香住に優しくしていたみたいだしな。そしていつも言っていたそうだし『私は香住のことを愛してる。愛してるから、香住にいい子に育ててもらいたいから、つい香住に酷いことしちゃうの。わかるわよね？』」

とな。それが、香住の今の人格に大きな影響を与えてしまった」  
院長は淡々と語る。私もそれに口を挟むことなく、時折頷いて話を促した。

「あの子は、相手が暴力を振るうのは自分のことを愛しているからだと思っっている。自分のことを求めてくれているのだと。それが終わると不安になる。自分のことを求めてはくれなくなったのだと思う。あの子は愛情というものを勘違いしている。……いや違うな」  
そこで院長は初めて憂いを帯びた表情を見せた。院長は酷く疲れているように見えた。

「あの子は、それしか知らない。あの子にとって愛情とはそういうものだ。香住の世界では、暴力こそ愛情だ」

「その究極が、殺人、ですか」

私の挟んだ言葉に、院長は黙って首を横に振った。

「それは私にもわからん。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。私には、あの子の考えていることは分からない」

「他人が考えてることなんてわからないのは当たり前です」

そう言っつて、なんだか香住が言いそうなことだなと思った。院長は乾いた笑みを浮かべ言った。

「君は、香住みたいなおことを言うんだな」

まったくその通りだと思った。

秋（中）

それから数日間は、一日中香住の傍にいた。他の仕事は一切せず、ただ香住の傍に居るとのことだった。院長は、明らかに香住を特別扱いしていたが、それについて咎める者は誰もいなかった。院長の人柄がよいおかげと言われればそれまでだが、それだけではないような気がした。しかし私にとって院長になにか思うところがあるうとなかろうと、私は私の仕事をこなすだけだ。私自身に思うところがあったとしても。

「先生、毎日私とばかり過ごして退屈でしょ？」

「どうかな、私は仕事を退屈とは思わないから」

今日も例にもれず、香住の病室を訪れ、そろそろ昼になろうかという時であった。香住はだいぶ落ち着いて、以前の落ち着きを取り戻していた。どうして急にあのようなことになったのかは、教えてくれないままだった。

香住の問いの答えを返すと、香住は湯気の立ち上るマグカップを両手で包むように持ち、その中に視線を落としたまま言った。

「先生は、私のこと好き？」

「……好きだよ」

「違う違う、そういう意味じゃなくて」

「……私に彼女がいることは知ってるだろう」

「それでも聞いたの」

私は目の前の少女を見た。長く綺麗な黒髪、雪のような白い肌。沙耶が太陽なら、香住は月だ。まるで正反対な二人の女。

「わかってる。先生は彼女のことちゃんと愛してる。でも、私か彼女を選べと言われたら、先生はきつと私を選ぶよ」

香住は顔に笑みを張り付けながら言った。笑っているのに、その声はとてもとても悲しそうだった。

「悲しいね、そんな風にしかいられないなんて」

「ああ、そう思うよ」  
私が、私たちが幸せになる選択肢は、あとどれくらい残されているのだろう。あるいは、もうひたすら悲劇に向かって歩いて行くしかないのかもしれない。

\*

「ねえ、疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

久しぶりに会った沙耶に、開口一番そういわれた。僕は「そう？」と答えた。今日は彼女が僕の部屋を訪ねてきていた。

「最近、仕事はどうなの？」

「今は女の子を一人診てる」

「へえ、どんな子？」

「君と正反対で、僕と同じ子」

謎かけのような僕の返事に、沙耶は小首を傾げた。

「なにそれ」

「ああ、気にしないで。やっぱり沙耶のいう通り疲れているのかも。昨日は香住と外に出かけたし、夜もなかなか寝てくれないで、ずっと傍にいたから寝不足だね」

「……なにそれ」

先ほどと同じ台詞。しかし、後者に含まれたとげとげしさに気付かないほど、僕も愚鈍ではなかった。

「それが仕事だからね」

我ながら、なんと言い訳じみた答えだろうと思った。当然、彼女がそれで納得するはずもなく、僕を軽く睨みながら言った。

「女の子と出かけて、寝るまで傍にすることが仕事なの？」

「沙耶、相手は患者だよ」

「患者でも女よ！」

とうとう沙耶は声を荒げて立ち上がった。座ったままの僕は彼女の顔を見上げるような格好になった。正直、僕は彼女がどうしてそん

なに怒っているのかわからなかった。僕が知っている限り、沙耶はそんなことで（たとえ心の中で何を思っていたとしても）一々怒ったりするような人ではなかった。

「沙耶が心配しているようなことにはならないよ」

「……ごめんなさい。なんだか、最近敬が変わっていくみたいで、それがその香住って子のせいなんじゃないかって思ったら、なんだかすごく嫌で」

沙耶は一気に頭が覚めたように怒りを収めた。その変わり、こんどは酷く不安げな表情を浮かべる彼女を、僕はどこか冷めた目で見ていた。自分が気が付いた。沙耶は僕が変わったと言ったけれど、そうではないのだ。これが本来の僕で、香住に出会ったことでいまままで作り上げてきた「僕」が少しずつ壊れ始めているのだ。僕はそう思った。

「敬、もうその子の主治医やめて」

「それはできないよ」

「なんで、もう無理だと言ってよ」

「僕は、きつと香住と離れるなんてできない。あの子を、僕の目の届かないところに置くことはできないよ。でも、信じてほしい。僕は香住のことを愛しているわけじゃない。そうじゃない。僕が好きなのは沙耶だよ」

「わかんない、わかんないよ、敬。私、敬がわからない」

それは当たり前だと言おうとして、やめた。当たり前など、この世にないのだから。だから僕は、黙って沙耶を抱きしめた。そうすることで、何もかも閉じ込めて、なかったことにするかのようにならう。

## 秋（下）

次の日、香住に沙耶との一件を話して聞かせた。二人の間のことを人に聞かせるなどいささか無神経にも思えたが、香住に何かあったらうと半ば断言するように問われれば、答えないわけにはいかなかった。

「その人の好きは本物の好きなんだね」

香住は、なんだか少し嬉しそうだった。私が首を傾げているのを見ると、香住はふふつと笑って言った。

「好きってね、そういうものだと思うの。自分だけを見てほしい、たとえそれが好意でも悪意でも、その人の意識が他の人に向くのが我慢できない。そういうもの」

歌うように語る香住。そんな強い感情を抱いたことがない私にはあまり共感できなかったが、昨日の沙耶を思い出して、そういうものもあるのだろうとなんとなく納得した。

「そういうものか」

「そういうものなの。だから、先生はすごく好かれるんだよ。モテたでしょ」

「まあ、それなりに。でもそれとこれと関係が？」

「先生はさ、何にも興味ないから。だから、きつと自分を好きになつてくれたら、自分以外のものに興味が行くことは無いって安心できる。馬鹿みたいよね」、何にも興味ないんだから、「誰か」にだつて興味湧くわけないのに」

自分のことを他人に断言され、私はなんだか複雑な気持ちになったが、それを否定する必要もなかったので黙って香住が話すのを聞いていた。

「私も先生のこと好きだよ。でもそれは先生の彼女とは違う理由」  
「なんだい？」

いつの間にか、いつもの窓際から来客用の椅子に座る私の目の前に

移動してきていた香住は、そつと私の頬に、自分の手を添えた。指先はひんやりと冷たく気持ちよかった。

「先生が、誰のものにもならないから。私はそれでいいの。私が嫌なのは、私が好きな人が、私以外の誰かのものになることだから」  
ああ、と私は納得した。香住が、どうして実の親の虐待を受け入れ続けたのか。育ての親を殺したのか。それはすべて、相手が自分から離れていかないようにするため。納得すると同時に、哀しいと思つた。そんなことでしか、相手を繋ぎ止められないことにはない。そんなやり方しか、相手を繋ぎ止める方法を知らないことが。

「私は、昔から何かに執着するということが知らない。なんでそうなのか、自分でもわからない。けど、香住に会って、初めて何かに興味を持つということを知つたよ。皮肉だね。君は何にも興味を持たない私を好きなのに、私が初めて興味を持ったのが君だなんて」  
私は香住の腰のあたりを引き寄せ、その腹のあたりに顔をうずめた。「嬉しいけど、残念。私たち、幸せにはなれない世界で生きてるのかもね」

香住の、その言葉が、無意識に頭の中に焼きついた。ただその意味を考えることを、今はしたくなかった。

冬(上)

私は12月に入ったところから、病院に行かなくなった。これでもかと貯めていた有給を、惜しみなく使い今日で二週間。私は今日も沙耶のアパートを訪れていた。

合鍵でカギを開け、中に入ると電気がついておらず、カーテンも閉められているせいで部屋は薄暗かった。

「沙耶」

私が呼びかけると、人の動く気配がした。靴を脱ぎ部屋に上がり、慣れた手つきで部屋の電気をつけ、カーテンと窓を開け、空気を入れ替える。もう冷たくなってきた空気が心地よい。

「沙耶、もう朝だ。起きて、着替えて」

「ん……もう少し」

しばらくして、沙耶はごそごとと布団から這い出てきた。まだとろんとした目をこすり、緩慢な動きで床に落ちていた服を拾い、身に着けた。

「ほら、朝ご飯作るから顔をあらっておいで」

沙耶を洗面所へと促し、私は買ってきた食パンをトースターに入れ、目玉焼きを作る。顔を洗ってさっぱりしたのか、寝起きよりもしゃきつとした沙耶が、トーストと目玉焼きののった皿を持ち、テーブルの上に置いた。

「おいしそう。おなか空いちやった」

「昨日はちゃんと夜食べたのかい？」

「うん、敬が作ってくれたシチュー食べた。おいしかったよ」

「それはよかった」

短い会話の後に、沙耶の「いただきます」を合図に、しばし無言で朝食を咀嚼した。沙耶は、秋の初めに比べ少し痩せた。しかし一ヶ月前、殆ど拒食状態だったところに比べれば何倍もマシだった。

「今日は、天気もいいし散歩にでも行かないか」

「行きたい。敬、自転車漕いでよ。私その後ろに乗りたくない」

「自転車あるの」

「うん、空気入れたら乗れるよ」

そういうことで話がまとまり、食器を洗った後、私たちは近くの土手まで行くことにした。

一ヶ月前、突然沙耶は心のバランスを崩した。沙耶が会社で倒れたという連絡を受け、急いで病院に行って見たものは、生気を失って、抜け殻のようになった沙耶の姿だった。医者は、精神的なものだと言った。私はそれを黙って聞いていたが、沙耶がそうになってしまった原因は、嫌になるほどよく分かっていて、分かってはいるからこそ、私はただ黙って沙耶の手を握ることさえできなかった。

「気持ちいいね」

私の腰に腕を回し、背中にもたれかかるようにして座る沙耶が言った。私は「そうだね」と答え、少しスピードを上げる。そして冬独特の冷たい空気が頬を切る感じを二人で楽しんだ。

しばらく漕いで、私たちは自転車を止め、土手を降りた。春には青々とした草が生え、小さな花がところどころに咲くこの土手も、今は下の土が顔を出していた。

「春になったら、お弁当持ってきたいね」

「そうだね」

沙耶が楽しそうに笑いながらそう言い、一人川縁まで歩いて行ってしまった。その後ろ姿を見ていると、私は沙耶の姿がぼろぼろと崩れていく錯覚に襲われた。私はそれに驚きはしなかった。かつて沙耶であったものが跡形もなく崩れてしまって、私の中に残ったのは言いようのない寂寥感と罪悪感だった。どう言い訳しても、言い訳するつもりは少しもないが、沙耶が壊れてしまったのは、間違いなく私のせいなのだから。沙耶が私のことを深すぎるほど愛していることを知りながら、何もしなかった。かといって、同じように沙耶を愛することもできない自分が、今はただ憎かった。

「沙耶、危ないよ」

いつのまにか、あと一歩も歩けば水の中という場所に沙耶は立っていた。私が呼びかけると、沙耶は振り返って手を振った。戻っておいでと呼びかけると、沙耶は笑って首を横に振った。彼女の形の良いい唇が言葉を紡ぐ。私と沙耶の距離は遠く、彼女の声は聞こえないけれど私には、何故かそれがはつきりと聞こえた。その瞬間、私は我を忘れて走りだした。無我夢中で走り、届くはずもない手を伸ばす私の指先で、彼女の体はゆっくりと後ろに倒れていく。

「沙耶っ！」

伸ばした手は空しく中を掻き、激しい水音と共に、沙耶の体は水の中に消えていった。

\*

扉を開けると、優しい微笑みを浮かべて窓の傍に立っている、一人の女の子が目の前に立っていた。私はそれが香住だとわかるまでに短くない時間が掛かった。それほどに、私の知っている香住と、目の前の少女は違っていたのだ。月明かりに照らされた彼女は、およそ生氣というものの欠片も持っていないようだった。足音も立てずに私の元に歩いてくると、私はやっとそれが香住だと認識した。

「おかえり」

「ただいま」

私の背中に腕を回し、胸に頭を預けてきた香住の身体を抱き返す。その身体は冷たかった。

私は香住に引かれるままにベッドに腰掛けた。彼女も隣に腰を下ろした。

「沙耶が死んだよ」

人ひとりがこの世からいなくなつたという事実が、たったこれだけの言葉になつてしまうことがなんだか悲しかった。そして、生きていたときの彼女を表す言葉をなに一つ思い浮かばないことが哀しかった。

「彼女が死んで、悲しい？」

「ああ、悲しいよ。僕は沙耶が死んで悲しい。そんな、誰でもわかるようなことに、彼女が生きていたときに気付けなかった自分が哀しい」

香住が、ずっと手を伸ばして私の頬に触れた。それで私は、自分が泣いていることに気が付いた。重力に従って私の目から溢れて落ちる涙は、香住の手によって床に落ちることはなく、彼女の手を濡らしている。

「先生は、もう大丈夫だよ」

「そうだろうか」

「大丈夫。だってほら、彼女が死んだことをこうやって悲しめるんだから。それはね、自分のことを愛せてる証拠なんだよ。ねえ、先生。人はね、それぞれ世界をもってるんだよ。ここにいてる人たちはね、その世界に自分しかいない人たちなの。何も減らないし、何も増えない。孤独すぎて、みんなおかしくなるの。けど、先生は違う。先生の世界には彼女がいて、世界の一部が消えたから、先生は泣いてるの。自分の世界を愛せているから、泣けるんだよ」

香住はほんの少しの淀みもなく言葉を紡いだ。それは驚くほどなんの抵抗もなく私の中に入ってきた。私はみつともなく嗚咽をもらしながら泣いた。世界が欠ける痛みを、私はようやく知ったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9663w/>

---

春に溺れる

2011年11月13日10時39分発行